第 500 号
2025 年 3 月 27 日

土佐のわらべ

オーテピア高知図書館
子どもの本の読書会だより

《第 522 回(2025 年 3 月 13 日) 子どもの本の読書会記録》 参加者:11 人

時間:10:00～11:30 場所:オーテピア 4 階集会室

『伝言』 中脇 初枝／著 講談社

３月の読書会で、この「土佐のわらべ」は500号を迎えました。記念すべき回の課題図書として、高知県出身の中脇初枝さんの小説『伝言』を選びました。中脇さんは、高校生で作家デビューし、絵本、昔話、小説など多くの作品を発表しています。

課題図書『伝言』は、満州で暮らす女学生のひろみを主人公に、終戦へと向かう満州での生活が、交流のある中国人家族や、軍で働く若者の視点も交えながら描かれています。

次に、読書会に参加した方の感想を紹介します。

＊＊

●祖母が戦争前の満州にいた。社会として戦争のことを封印してきたと思う。戦争に行っていた父も語ることはなかった。自分はもっと話を聞いておけばよかった。後世に歴史を伝えたいという思いが伝わる本だった。

●今この本に出合った意味を考えた。3．11もこの本に含まれている。忘れたい人、あれでよかったと思う人、どうすればよかったのかこれからの未来を考える人、みんな葛藤を抱えながら進んでいく。体験や想像だけでなく、本は考えることをさせてくれる。

●満州での生活、生きるか死ぬかも、運で決まってしまったのか。語り継ぐ人がいるおかげで、私たちは知ることができる。日本に帰ってきたひろみは日本人としてのアイデンティティをどう培ってきたのか、気になった。多くの人に読んで欲しい本。

●ひろみが、中国を再訪した場面で涙が出た。新京という街はなく、自分たちがしゃべっていたのは中国語ではなかった。船の上でひろみは「生きる」と決意する。こういう体験をした人たちが今も生活している。いろいろなことを伝えてくれた良い本。

●これまでは戦争を体験した人が戦争のことを書いていた。この本は、今の時代に戦争を伝えてくれる。ひろみが資料集めにこだわるのは、満州に置いてきた自分の一部だから。そういう自分だけのモチベーションを、若い人にも持ち続けて欲しい。

●弱いものは振り落とされ、桟橋まで辿りつけなかった。生きることを前提に考えられていない。それが今の日本にも残っている。伝えられた私たちの世代にできることは、本を読んでみんなで語り合うこと。今の中高生に読んでもらいたい本。

●戦争は戦地にいなくても影響を受ける。伯父が満州で戦死したが、木の箱に石が入って帰ってきた。母は、終戦前に帰国した伯父を引き止めなかったことを後悔していた。今の日本は戦争をしていないが、無関係ではない。

●藤原てい著『流れる星は生きている』で引き揚げの実態を知った。満州しか知らないひろみが、広い大地に落ちる夕日を思う場面が印象的だった。李太太と対等ではないが個人的なつながりがあってよかった。

●ひろみが満州を祖国だと思っていたこと、青酸カリが必要になってから戦争が始まったと思ったことが切なかった。教育が子どもに与える影響は大きい。でも、自分のしたことをごまかしたくないと、伝える勇気を持ってくれた姿に希望を感じた。

●文章が感情的ではない分、考えさせられた。戦時下でも女学生の考えることは同じ。そこに生活があると思った。伝えていくことは大切だが、それでよくなるのか。多くの情報を受け取り、正しい判断ができているのか不安。日本人の協調性が心配。

●戦争の恐ろしさをまざまざと感じた。差別の上に成り立っていた満州のこと、生物兵器を載せる風船爆弾を作っていたこと、気づけないで通り過ぎた後悔がひろみにはあり、それを忘れない。そして、伝えていこうとしている。良い本に出合えた。

次回 4 月 10 日(木)10:00～11:30 オーテピア 4 階集会室

📖『富士山うたごよみ』 俵 万智/短歌・文, U.G.サトー/絵 福音館書店

※申込み・参加費は不要です。